

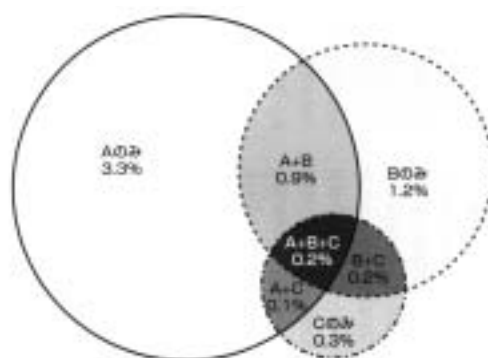
<p>ウィスク スリー WISC-Ⅲ 知能検査</p>	<p>知的発達の違いがあるかどうかを知ることができます。また、認知の特徴として、言葉と絵のどちらを用いる指示が理解しやすいのか、数多くの伝達事項を覚えていられるかなどを知ることができます。行動や対人関係の特徴を分析する基にもなります。基本的な検査ですので、各学校で実施できる体制が必要です。</p> <p>《用語》</p> <p>◆言語性IQ (V I Q) : 一般的には、「言語能力」。場合によっては、「聴覚的な情報処理能力」ととらえます。</p> <p>◆動作性IQ (P I Q) : 一般的には、「非言語能力」。場合によっては、「視覚的な情報処理能力」ととらえます。</p> <p>「V I Q」と「P I Q」の差を比較することにより、個人内の能力の偏りを知るための指標にします。ちなみに、「全IQ (F I Q)」は、同年齢の他の児童生徒と比較し、知的な遅れがあるかどうかの指標とします。「V I Q」と「P I Q」の差が、統計学的に意味のある程大きい時、「全IQ」の値は参考となりません。</p>
<p>ケーエービーシー K-A B C心理・教育 アセスメントバッテリー</p>	<p>一人一人の学び方に合わせ、どんな手だてが有効かを知ることができます。漢字学習を例に挙げると、①筆順を重視したり短文とセットで読み書きしたりする方法、②絵や成り立ちと結びついたり似たような字を集めたりする方法のようにおおまかに2つの方法を使い分ける必要性が明確になります。また、学び方に合った学習を積み重ねてきたかどうかも知ることができます。授業改善のきっかけをつくることのできるでしょう。</p> <p>《用語》</p> <p>◆継次処理：情報を一つずつ連続的に順番に処理するスタイル（上記①）</p> <p>◆同時処理：情報を空間的に全体としてまとめて処理するスタイル（上記②）</p> <p>目的地までの到達方法について説明を受ける場合を例に挙げると、「目印や交差点の名称、前後左右の進行方向や距離など、進む順に説明を受けた方が分かりやすい場合」は「継次処理」が得意といえましょう。「地図を広げ、現在の場所と目的地を示された方が分かりやすい場合」は「同時処理」が得意といえましょう。</p>
<p>アイティーピーイー I T P A 言語学習能力 診断結果</p>	<p>見たり聴いたりしたことを基に、考えたり表現したりする上で、苦手なことを明確にし、カバーする方法を知ることができます。例えば、書くことが苦手な場合には、見て書く・なぞって写す・聴いて書く・一度話してから書くなど、一人一人に合わせた有効な方法を見いだすことができます。読み・書きの力を保証するためのヒントを得ることのできるでしょう。</p>

ピーアールエス アール <b>PRS-R</b> (LD児診断のためのスクリーニング・テスト)	児童生徒は直接居合わせる必要がないスクリーニングテストです。視点に基づき行動観察するだけなので、担任が単独で実施可能です。LDの傾向の有無、「言語性LD」「非言語性LD」といった特徴を把握することができます。気になった時にすぐに実施できるよう学校に常備しておきましょう。
フロスティッグ視知覚発達検査	学習困難や情緒障害を起こす子どもの中には、視知覚能力の発達が不十分である場合が多いとされています。そこで、目から情報を受け取り筆記で応答する方法から視知覚に関する能力と運筆に伴う器用さを把握し、指導に役立てるものです。
ベンダー・ゲシュタルト・テスト	9個の図形を模写することでその心理的過程を探り、視覚・運動知覚機能の成熟と学業成績・器質障害・情緒の問題などとの関係を統合して児童の姿を把握することができます。
投影法	バウムテスト・H.T.P.テスト・家族画等を用いて子どものおかれている環境や子どもの心理状態を推測します。ただし、投影法は臨床経験豊かな専門家でないと解釈に危険を伴います。あくまでも、背景情報から得られた解釈を補助するための資料として扱うことがよいでしょう。

## LD, ADHD等のある児童生徒の割合

75項目に及ぶチェックリストを用いて実施された「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」(文部科学省, 2003年)によると、「知的発達に遅れはないものの、学習面や行動面で著しい困難をもっていると教師が回答した児童生徒」の割合は、6.3%でした。学級一つあたり2.3人の割合です。

また、カテゴリAの4.5%も注目すべき値です。観点を定めて見返すことで、学習上の困難を示す児童生徒の姿が浮かび上がるといえるでしょう。目立ちやすい行動面のみに振り回されることなく、丁寧に実態を把握していく重要性が感じられます。



—— A: 「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」に著しい困難を示す  
 - - - - B: 「不注意」または「多動性-衝動性」の問題を著しく示す  
 - · - · C: 「対人関係やこだわり等」の問題を著しく示す

図 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査 (全国5地域 41,579人が対象)